

●第三節 三心について

『選擇本願念佛集』（以下『選擇集』）の第八章段（以下、三心章と言う）について見てもわかるように、法然は三心については善導と同等以上に重要視していた。これは法語類にも三心に触れたものが多く残っていることからわかる。多くの場合は善導の『觀經疏』、『往生礼讚』を日本語訳し、平易に解釈したものであるが、またそれは善導の意図をいかに正確に伝えたかったかという意志の表れと見ることもできる。しかし、明らかに善導の所説を進めて解釈していることも多い。

法然は三心をひと言で「行者至要、往生目足也」（『觀無量寿經釈』、『法全』一二六頁）と述べ表している。

次に法然独自の三心論について検討してみたい。

●第三節 選擇本願念仏と三心

法然はその主著である『選擇集』において選擇本願念仏を確立した。その『選擇集』の構成から法然の三心論の一端を論じてみたい。

『選擇集』の三心章には『觀經疏』、『往生礼讚』の三心部分のほとんどが引用され、その

あとに短い私積が加えられている。その篇目には「念仏行者必可具足三心之文」(『選擇集』土川本、六〇頁)とあり、『往生礼讃』の三心略積を受けている。私積においても三心具足を強調し、「若少一心即不得生」(『選擇集』土川本、七九頁)と言ひ、一心でも欠けたならば往生することはできないと付け加えている。

しかし、それにも増して重要なことは『選擇集』において第二章段に「善導和尚立正雜二行捨雜行歸正正行之文」という篇目のもと、善導の『觀經疏』散善義深心積の就行立信について論じていることである。すなわち法然の念仏には、それを選び取ったときからすでに、一部ではあるが深心をもっていることになるのである。つまり、選んで選び抜いた念仏には、必ずその行に対しての深心が具わっていることになるのである。これは三心具足の念仏において何を意味するのであるか。法然はこれについて明確にはしていないが、選擇本願念仏が信心確立の根本原理となっていると考えられるのである。

『七箇条の起請文』に

弥陀の四十八願は、称名の一行を本願とすと心えて、ふた心なく念仏するを、深  
心具足というなり

(法全) 八〇九頁

とあるのはこの意であろう。